

江戸川乱歩「幽霊塔」における時計塔

——「時は金なり」のアイロニー——

浅岡真衣

はじめに

『幽霊塔』は、江戸川乱歩による探偵小説で、一九三七（昭和十二年）一月から一九三八（昭和十三年）四月まで『講談倶楽部』に連載された。これは、黒岩涙香の翻案小説「幽霊塔」〔萬朝報〕に一九九九（明治三十二年）年八月十日から一九九〇（明治三十三年）三月九日まで連載）をもとに乱歩がリライトしたものである。乱歩は、連載が始まる前の号に載せた「幽霊塔の予告文」のなかで次のように述べている。

『白髮鬼』も『幽霊塔』も、黒岩涙香の名訳があり、世に知られてゐるのですが、文章が古風で、年少の方々や御婦人方にはやや親しみにくいところがあり、本誌の読者諸君のなかには、涙香の作品を読んでゐない方も多いことと考へます。

そこで、私は嘗ての『白髮鬼』の場合と同じやうに『幽霊塔』を現代の文章に書き改め、又筋の上にも私流の変化を加へて、謂はゞ私の『幽霊塔』を書いて見やうとする訳です。（中略）

御承知の如く、『幽霊塔』は本格の探偵小説ではありませんが、外国にかういふ種類の小説が初まつて以来の、夥しい作品の中で、通俗的な面白さでは、ほとんど比類がない程ツバ抜けた小説です。想像も及ばない奇怪な着想、魂もしびれるやうな恐怖、不思議に次ぐ不思議の筋の変化、私はこの小説を始めて読んだ時、夜の目も寝られない興奮を今に忘れることが出来ません。これ程面白い小説を、時代の古きや文章の難しさの為に、埋もれさせて置くのは本当に惜しいことだと思ひます。

乱歩が涙香の「幽霊塔」に対してかなり愛着があつたこと、これから始まる、自らが新たに著す「幽霊塔」に対しての意気込みが感じられる。「通俗的な面白さでは、ほとんど比類がない程ツバ抜けている「幽霊塔」は、乱歩以降、現在まで様々な作品や作家にその影響を与えている。

引用のなかに「黒岩涙香の名訳」とあつたように、「幽霊塔」には原作がある。この原作について涙香は「原作者はイギリスのベンジスン夫人で、原題名はザ・ファントムタワーである」と述べていた

が、小森健太郎^三が指摘するように、そのような著者も著作も現存していない。涙香の翻案小説は、連載途中に何度か他の新聞社に原作を知られてしまい、その後の展開とあらすじを掲載されて連載中止になったことがある。こうした事態を避けるために、原作を伏せたのだろうと言われている。このため、原作の特定は困難を極めた。それからおよそ一世紀、紆余曲折を経て「幽霊塔」の原作は一八九八（明治三十一）年に発表されたアリス・マリエル・ウィリアムスン^三の『灰色の女』であることが判明した^四。

ウィリアムスンの原作、涙香版、乱歩版で多少の違いはあるが、基本的に物語の筋は変わらない。「幽霊塔」のあらすじを、以下、乱歩版に即して説明しておく。長崎の片田舎の、時計塔のある古い屋敷は訳あって「幽霊塔」と呼ばれていた。この時計塔を建てた大富豪・渡海屋市郎兵衛と、その女中で後にこの屋敷の持ち主となった長田鉄が、この時計塔で悲運の死を遂げたからである。そんないわくつきの「幽霊塔」を買い取った叔父・児玉太郎の命を受けて、北川光雄は幽霊塔を訪れた。そこで、彼は時計塔に詳しい謎の美女・野末秋子と出会う。その日を境に、時計塔で不可解な事件が次々と起こり、光雄と秋子は事件に巻き込まれていく。秋子を救うために奮闘する光雄は、次第に秋子の謎、そして時計塔の謎へと迫っていく。

原作から乱歩版まで、時計塔が物語の舞台であることは変わらない。乱歩が「想像も及ばない奇怪な着想」と言ったように、作品の魅力の核となっているのがこの時計塔である。作中で時計塔は、不可解な事件が起こり、その結果人が亡くなる場所、そして伝説の財宝が隠されている場所である。なぜ、これらの舞台が時計塔なのだ

ろうか。時計塔が舞台であることに何か意味があるのだろうか。これまでの先行研究では、翻案作品であることや、作中に登場する整形手術について論じているものはあるが、時計塔については注目されてこなかった。そこで本稿では、時計塔が作品のなかでどう描かれているか、登場人物との関わりなどに注目して、時計塔がこの作品のなかでどういう意味を持つのかを考察していきたい。

一 時計塔の文字盤の表現

「幽霊塔」の物語の舞台となるのは、長崎の片田舎の古い屋敷にあるいわくつきの古い時計塔で、物語のなかで重要な事件が起こる場所がこの時計塔である。そこで、まず時計塔がどう描かれているのかを確認していく。

最初に時計塔について書かれているのは、作品の冒頭、物語の導入部分である。「その事件に出てくるものは、美しい女の幽霊ばかりではない。淋しい山の中に、まるで一つ目の巨人のようにそびえている古い古い時計塔がある^五」とある。ここで注目したいのは、時計塔を「一つ目」「巨人」と例えている点である。このあとも、何度か同じような表現が見られる。

話には聞いていたが、見るのははじめてであった。それにしても、なんという不思議な建物であるう。白い空と山と森を背景にして、ヒョイと地面から飛び出したお化けのような、無気味な夢の中の景色のような、古風な時計塔がそこにそびえているのだ。六

この時計塔は、大富豪・渡海屋市郎兵衛が自らの莫大な財宝を隠すために建てたものである。誰にも財宝を見つけられないように、時計塔の地下に迷路、それから誰にもわからない秘密室を作ったというのである。渡海屋はある日、その秘密室に財宝を運び込んだが、いざ出ようとしたところ、自らが作った迷路に迷って出られなくなつてしまつた。声を張り上げて助けを呼んだが、渡海屋しか秘密室への行き方を知らないで誰も助けに行くことが出来ない。行き方を探しているうちに、渡海屋は亡くなつてしまつた。この一件をきっかけに、時計塔は「幽霊塔」と呼ばれるようになった。引用は、このいわくつきの幽霊塔を買い取ることにした叔父・児玉丈太郎の命を受けて、主人公の北川光雄が幽霊塔を訪れた場面である。光雄は時計塔について以下のように続ける。

そのなんとも形容できない奇妙な建物の、三階の屋根の上に、芝居小屋の櫓みたいに、四角な時計塔が乗つてゐる。そして、大きな白い文字板が、一つ目の巨人のように、ギョロリとこちらを睨みつけてゐるのだ。^七

幽霊塔を外から見終わつた光雄は、中に入ろうと屋敷に近づきながら、次のように思う。

ますます雲が深くなつた薄暗い空を背景に、時計塔の一つ目が、ギョロツと睨んでいるのが、気にかかつて仕方ない。私の眼は、見まいとしても、磁石で引きつけられるように、時計の文字板

を見上げないではいられなかつた。そうして文字板を見ていると、思わずドキンとするような妙な現象が起こつた。ほかでもない、何十年の年月を経て錆びついてしまつてゐるはずの時計の針が、まるで生あるもののようにグルグルと廻つたのだ。^八

時計塔は繰り返し「一つ目」「巨人」「お化け」に例えられてゐる。どれも不気味な印象を与えているが、もうひとつ注目したいのは、直前の引用の、時計塔の「一つ目」に「睨まれている」ように感じているということである。光雄には、時計塔がまるで生きているように、人のように感じられているのだ。

時計塔をこのように表現したのは何故だろうか。これを考えるために、次はもとになつた黒岩涙香の「幽霊塔」での時計塔について見ていく。

土地は都から四十里を隔てた山と川との間で、可なり風景には富んで居るが、何しろ一方ならぬ荒れ様だ、大きな建物の中で目ぼしいのは其の玄関に立つて居る古塔で有る。此の塔が英国で時計台の元祖だと云う事で、塔の半腹、地から八十尺も上の辺に奇妙な大時計が嵌つて居て、元は此の時計が村中の人へ時間を知らせたものだ。塔は時計から上に猶七十尺も高く聳えて居る。夜などに此の塔を見ると、大きな化物の立つた様に見える。爾して其の時計が丁度「一つ目」の様に輝いて居る。昼見ても随分物凄いや有様だ。^九

余が下検査の為此の土地へ着いたのは夏の末の日暮頃で有つた

が、先ず塔の前へ立つて見上げると如何にも化物然たる形で、扱は夜に入るとアノ時計が、目の玉の様に見えるのかと、此の様に思ううち、不思議や其の時計の長短二本の針がグルグルと自然に廻った。一〇

涙香版で、乱歩版で引用した部分に該当するのは、以上の二か所である。ここでも時計塔を「一つ目」「目の玉」「化物」と表現している。最後に、原作の『灰色の女』をみる。

アペイ館は、厳めしいというよりもむしろ奇異な雰囲気を湛えた建物だった。真つ平らな正面部分が川に対して四十五度くらい斜めに建てられているところや、壁面が無数の小さな窓で飾られていること、また樫材でできた丈の低い薄汚い扉がはまっている正面ゲートのアーチの門の上に、大時計を載せた時計塔が鎮座しているという特異な外観などが、館にそんな感じを与えていたのだろう。二

突然、視界の端で何かが動いたように思われた。急いでそちらに眼をやると、驚いたことに、これまでずっと止まっていたままになっていたはずの大時計の、金メッキを施した大きな二本の針が、文字盤の上をするすると動いているではないか。三

『灰色の女』では、時計塔は「一つ目」「化物」といった表現はされていない。「一つ目」「化物」といった表現がみられるのは、涙香版と乱歩版だけである。そして、原作から涙香版、乱歩版と書き直

されていくにつれて、主人公の時計塔に対する感じ方も変わってきている。原作では淡々と時計塔について語られているのに対し、涙香版では「化物の立ったように見え」てきて、乱歩版ではさらに「時計塔の一つ目」に「睨まれている」ように感じている。時計塔に対して感じる恐怖が大きくなっているのである。日本人が翻案する際に、時計塔に対して不気味さや恐怖を感じさせる表現が加わっているというのは興味深い。原作と日本での翻案で、時計塔の表現に違いがあるのは何故だろうか。次節から近代の日本で時計塔、あるいは時間がどのように感じられていたのかを踏まえて考察していく。

一一 時計塔について

明治初期の日本は、欧米諸国に追いつこうと近代化を急いでおり、西洋の様々な制度を取り入れた。そのなかでも早い時期に取り入れられたのが工場や学校、軍隊や鉄道などである。西本郁子はこれら制度が導入される時、同時に定時法に基づいた時間規律も導入され、時計塔がその敷地内に作られたと指摘している。西洋風の時計塔が最初に作られたのは、一八六八（明治元）年、横須賀製鉄所である。東京で最初の時計塔は、一八七一（明治四）年に竹橋陣営に作られたものである^三。

この竹橋陣営の時計塔に関して、西本は次のように述べている。

時計塔は文明開化を象徴する。しかし、時計塔を描いた作品のなかには、建物の輪郭としての尖塔を描いても文字盤までは描き込んでいないものもある。たとえば、井上安治の錦絵「竹

橋内」がそうした作品である。竹橋陣営の時計塔を中心に、左右に長く伸びた兵舎をできるかぎり画面におさめようとしたからだろう。やや離れた位置から建物全体を眺めている。そのため、数字や針がないどころか、文字盤の部分は単なる円ではない。丸く空いた「眼」のようにも見える。まるで時計は、敷地内のすべてを見回す「監視の眼」のようだ。

そういえば、「時計」をさす英語にはクロック (clock) のほかにもうひとつ、ウォッチ (watch) がある。もともと「見張り」を意味する言葉である。文字盤が眼と化した塔は文字どおり時計塔 (clock tower) であるだけでなく、物見の塔 (watch tower) の機能もあることをほのめかしているのだろうか。(中略)

(彼の絵師としての洞察が建物の性質をみこくに描きだした。軍隊という、その活動が二四時間管理下に置かれる制度にあつては、まさに時間が眼となつて一人ひとりの行動を絶えず高みから監視しているかのようなのである。一四

ここで例に挙げられている「竹橋内」でも、「幽霊塔」にあつたように、時計塔の文字盤を「眼」だと捉えて描かれている。ここでは、時計塔の文字盤は単なる「眼」ではなく「監視の眼」だと述べられている。時計塔は、その文字盤が表す「時間が眼となつて一人ひとりの行動を絶えず高みから監視している」。「軍隊という、その活動が二四時間管理下に置かれる制度」とあつたように、何時に何をするか決められており、常に時間を意識して行動しなければならぬ環境では、時間に見張られて行動を制限されているように感じら

れるのである。

一一一 鉄道と時間意識

時計塔が建てられていたのは工場や軍隊といった公の施設ではない。西本によれば、文明開化を象徴するもののひとつとして、商店に据えられた時計塔が市民に親しまれていた。特に、「外神田の大時計」こと京屋時計店本店の時計塔には、十五分ごとに鐘を鳴らすウェストミンスター式の時報装置があり人気があつた。時報が鳴る間隔が、不定時法の一刻(約二時間)ごとであつたことに比べると、十五分ごとというのはその八分の一にまで圧縮されたことになる。「かつてない精緻な機構が分秒の細かい単位で時を刻む。(中略)機械時計のある生活。過ぎゆく時の早さは、かつてないほど身にしみて、人々は分という細かい単位の時間を感じるようになった。

人々が分単位の時間を意識するようになった要因のひとつには、橋本毅彦^{一五}が指摘しているように鉄道の発達が大きく関係している。「創業期官営鉄道の運輸面での最大の課題は、従来の交通機関に対する鉄道の優位性を利用者に周知させ、その信用をいかに獲得するかという点にあつた。そのためにはどうしても定時運行を確保し、輸送の迅速性を彼らにアピールする必要」^{一六}があつた。こういう理由もあり、鉄道は定時運行を目標にして努力していた。列車が定時に駅に到着して定時に発車するには、利用者も到着時間や発車時間に合わせて行動する必要がある。しかし、鉄道が開通した一八七二(明治五)年はまだ改暦で定時法に移行する前だった。人々は不定時法で生活しており、時間通りに行動するという習慣は身について

いない。西本によると利用者に定時法の時間を意識させて鉄道を利用してもらうために、鉄道寮は乗車する者は遅くとも発車時刻の十五分前に駅に来て切符を買うなど都合はすませておくこと、また発車時刻を守るために、発車の五分前には駅の戸を閉めるという注意書きを出していた。そして次のように述べている。

鉄道のおかげで、時計や時間が妙に気になりました。明治の私たち自身もそのことを深く感じていたようである。時刻の正確さは、時間厳守とはまた別の意味で時計と鉄道を結びつけていた。^{一七}

時間を過ぎたら駅に入ることも出来ない。少しでも駅に着くのが遅れたら列車には乗れない。こうなると、人々は単に発車時刻だけでなく、分単位の時間を意識して行動しなくてはいけなくなる。こうして、人々の時間意識は変わっていったのである。

乱歩の「幽霊塔」にも何度か、主人公が列車に乗る場面がある。そのなかには始発の列車に乗るために駅に急ぐ様子が描かれている。主人公は発車時刻を意識して行動しており、鉄道による時間意識の変化がここにも表れている。

時計塔の時報装置、鉄道ともに定時法で時間を計るようになったことで、分単位など細かい時間を意識することになっていった。鉄道の定時運行は、「時間厳守」での運行だと言い換えることも出来るだろう。鉄道が開通してからは、鉄道の時間は定時法で、普段の生活は不定時法でというように、二つの時間制度が存在していた。しかし、一九二〇（大正九）年に「時の記念日」が制定され、普段の

生活でも「時間厳守」が求められるようになる。

源香の「幽霊塔」が発表された明治三十二年から、乱歩の「幽霊塔」が発表された昭和十三年の間に、人々の時間意識をさらに高めるきっかけとなった、この「時の記念日」について、次節でみていくことにする。

一三 「時の記念日」

日本人の社会生活の向上を目的として活動していた生活改善同盟会が、広く社会に時間厳守の習慣を定着させることを目的に、「時の記念日」の設定を提唱した。これを受けて一九二〇（大正九）年から、六月十日が「時の記念日」と定められた。

生活改善同盟会が「時の記念日」に行った主な活動は、時間厳守や定時励行を訴えるチラシの配布や、市中にクロノメーターを持ち出して通行人の時計を正確に合わせる、それから寺院や神社、工場や教会に依頼して十二時に一斉に鐘や汽笛を鳴らす、などである。他にも「時の講話」と題して時間に関する講演会を行い、時間に関する詩・標語・格言・替え歌などを一般の人から募集した^{一八}。

西本はこの生活改善同盟会の様々な活動の他にも、一九二五（大正十四）年に始まったラジオ放送によって、人々はよりいつそう正確な時間を意識するようになったと指摘している。ラジオでは「何時分です」という時報を告げる前に、十秒単位でカウントをしていた。これによって人々は分よりさらに細かい秒単位の時間を意識するようになった。そして一九三〇年代に入ると、このラジオで「時の記念日」にちなんだ歌^{一九}が放送されている。乱歩が「幽霊塔」を

発表する少し前に、さらに時間意識が変わる出来事が起きていた。

西本は「時の記念日」で使われていた標語などをいくつか挙げているが、その中には「時は金なり」に似ているものが多い。松江市生活改善同盟会で独自に作られた標語で「時に追はれず時を追へ、時と金とは活かして使へ」、それから「時の記念日」のために作られ、滋賀県神崎郡で配られたビラに載っていた「時の宣伝歌」には「人々時間を尊べよ／時は金なり黄金なり／フランクリンの言葉にも／時は命の元なり」とあることを指摘している。また、ラジオで放送された歌のなかには「金より尊い時間○」と題したものがあり、そのなかで「金より尊い宝は時間」という言葉がある。

「時は金なり」について少し触れておく。明治以降に紹介された「時は金なり」という言葉は、日本では「時間はお金のように貴重なもの」と解釈されて広まっていたと西本三が指摘している。この「時間は貴重なもの」は、だから無駄にしてはいけないという考えに繋がり、勤勉や勤労を奨励する意味合いで使われるようになった。そして栗山茂久三が、鉄道の定刻志向や工場での時間管理に基づく労働管理などの近代に入ってから「時間意識の変革の諸相」は、経済発展の影が随所にうかがえる」と指摘しているように、「時」と「金」は密接に関わっている。

「時の記念日」の標語に多く「時は金なり」と似た表現があることから、時間厳守をはじめとして時間の大切さを説く活動にこの言葉はうってつけだったようだ。

生活改善同盟会がこうして時間について熱心に説く一方で、これをよく思わない人々もいた。

生活改善同盟会が熱心に時間道徳を説き、街頭に繰り出しては人びとがもつ時計の正確さを確かめて回る一方で、時間厳守の宣伝を「押し付け」と受け取り、少なからず反発を抱いていた人たちがいた。時計はいらぬ、遅れる、壊れる、といって憚らない。時計に対するこのような不満の胸のうちには、時間の規律を求める制度への不信が渦を巻いていた。時間に象徴される社会の支配の陰をみてとつたからだろう。時計の性能を端からあてにしないのは、誰にも支配されることのない自由な生活への希求があるからだ。二三

こうした「時間の規律を求める制度」への不満を描いたと思われる作品を、西本はいくつか挙げている。その中のいくつかをここではもう少し詳しくみていきたい。まずひとつは、一九二一（大正一〇）年に発表された小川未明の「時計のない村^{三四}」である。

あらすじは以下の通りである。町から遠く離れたある村では時計のない生活が当たり前だったが、ある日、村の金持ちが「この文明の世の中に、時計を用いなくては話にならぬというので」時計を買ってくる。この金持ちは「自分がたくさんのお金を払って、時計を求めることを心の中で誇りと」した。その日から「村のものたちは、万事の集まりや、約束の時間を、この時計によってしなければならぬと思ったから」である。時計を珍しがった村人たちは、連日この金持ちの家を訪れた。これを妬んだもうひとりの金持ちも時計を買ってくる。しかし、この二つの時計には三〇分ほどずれがあった。どちらも自分の時計が正しいと言って譲らない。そしてどちらの時計の時間を信じるかで、村人たちは二つに分かれてしまう。「いまま

で、平和であった村が、時計のために、二つに分かれてしまいました。時計は神さまのようになってしまったのです。しばらくして、ひとつの時計が壊れてしまう。その時計が正しいと信じていた組は、「その日から真つ暗になったように、まったく時間というもののがわからなくなってしまう。そしてもう一方の時計も壊れてしまい、村人は全員時間がわからなくなってしまう。そのうち村人たちは、時計はすぐ壊れる、信用ならないと思い始める。誰かの「時計があったって、なくたって、この一日には変わりがないじゃないか」の一言で、村は以前の、太陽を仰いで時を知る生活に戻り、平和に暮らすようになる。

「文明の世だから」と時計で時間を見て生活しようとするものの、肝心の時計が示す時間にずれがあったために、村人たちは「正しい時間を表しているのはどちらの時計か」で言い争い、二つに分かれてしまった。太陽の動きでだいたいの時間を見ていた頃よりも、時計で正しい時間がわかる状態になったほうが、かえって村人たちの生活は都合が悪くなった。

この作品が発表されたのは、「時の記念日」設定の翌年、時間厳守をはじめ「時間」がいかに大切であるかについて叫ばれ始めた頃である^{二五}と西本^{二五}は指摘している。

もうひとつは一九三一（昭和六）年に発表された萩原朔太郎の「時計を見る狂人」である。以下、作品の全文である。

或る瘋癲病院の部屋の中で、終日椅子の上に坐り、時計の指針を凝視してゐる狂人が居た。おそらく世界の中で、最も退屈な人間が此所に居ると私は思つた。ところが反対であり、院長は

次のやうに話してくれた。「この不幸な人は、人生を不斷の活動と考えてゐるのです。それで一瞬の生も無駄にせず、貴重な時間を浪費すまいと考へ、あゝして毎日やつてるのです。何か話しかけてご覧んなさいきつと腹立たしげに怒張るでせう。黙れ！いま一秒時が過ぎ去ると。」^{二六}

前にラジオによつて秒単位の細かい時間を意識するようになったと述べたが、ここからもその様子がわかる。意識する時間は年代を経るごとに細分化している。

西本は指摘していないが、朔太郎の「散文詩自註^{二七}」のなかに「時計を見る狂人」に関して次のような文章がある。

詩人たちは、絶えず何事かの仕事をしなければならないといふ、心の衝動に驅り立てられてる。そのくせ彼等は、絶えずごろごろと怠けて居り、塵の積つた原稿紙を机上にして、一生の大半を無爲に寝そべつてゐるのである。しかもその心の中では、不斷に時計の秒針を眺めながら、できない仕事への焦心を續けてゐる^{二八}

時間を無駄にしてはいけない、だから何かをしなければならないと常に考へて、焦つてゐるのがわかる。「時間は貴重だ」無駄にしてはいけないという考へ方は、「時の記念日」で繰り返して伝えられてきたものである。

「時の記念日」が設定されてまだ日の浅い一九二〇年代の作品である小川未明の「時計のない村」では、時計に対する不信が描かれ

ている。しかし、「時の記念日」設定から時が経ち、ラジオ放送によってそれまでよりさらに細かい秒単位の時間を意識するようになっていった一九三〇年代の作品では、時間を意識することと狂気が隣り合わせであることが描かれている。萩原朔太郎の「時計を見る狂人」では、一秒というわずかな時間も無駄にしまいと時計を見ている老人が登場するが、彼は時間を意識するあまり人間性が失われている。一九二〇年代以降、時間を意識することへの批判が、文学のなかで問題になってきた。他にも時計を描いた作品の例は挙げられているが、年代を追うことに、その内容の薄気味悪さは増していく。

不定時法から定時法になり、時間は細分化され、人々はその細かい時間を意識して行動するようになり「時の記念日」も設定され時間への意識は徐々に高まっていった。だが、時間について説かれ、その大切さが強調されるほど、それに対する批判も出てきた。

新しい時間制度が取り入れられ、それが浸透していく過程にあった時代に「幽霊塔」は発表された。当時、時計やそこに表される新しい時間は、そこにあるというだけで人々を縛り、追い詰めることもある恐ろしい、気味の悪いものだと感じられていたのではないだろうか。そして、ただでさえ恐ろしい時間を表す文字盤が、巨大かつ頭上にある人々を見下ろしているような時計塔は、さらに恐ろしいものだった。それが、原作にはない時計塔の文字盤が目のように、睨まれているように感じるといふ表現に繋がっているのではないだろうか。

この章では物語の冒頭、時計塔について描かれている部分に注目してみてきた。この後、主人公が時計塔に気味悪さを感じたのが前兆であったかのように、時計塔で次々に事件が起こる。そしてその

事件を追い、この時計塔には元の持ち主の財宝が隠されているという伝説の真相にも迫っていく。次章からは、この財宝と時計塔に注目して、時計塔について探っていきたい。

二 財宝と時計塔

「幽霊塔」の物語のなかで、時計塔に莫大な財宝が隠されているという伝説がある。前節で少し触れたが「時は金なり」という言葉があるように、「時」と「お金」は密接に関わっている。そして「幽霊塔」では、この時計塔で、伝説の財宝あるいは財産をめぐる事件が起きて人が亡くなる。時間に関係する場所に財宝や財産が関係して事件が起きるのには何か意味があるのだろうか。この章では、時計塔で起きる事件に関わる登場人物の、時間やお金に対する価値観に注目して、時計塔が事件の舞台となっていることについて考察していく。

二―一 財宝に執着する人々

まずは、時計塔で財宝（財産）に関係して起きた出来事を話に沿って見ていく。

最初に財宝に関わっているのは、その持ち主であった渡海屋市郎兵衛である。渡海屋は、自身の莫大な財宝を世間の眼から隠すために時計塔を建て、その地下に迷路と誰にもわからない秘密室を作った。この当時は「維新前の物情然たる時世」で、大名や浪士からの微発を恐れていたということもあり、どんなに探されても見つから

ないように、こういった仕掛けを考えたのだという。しかし、この仕組みが巧みに出来すぎたため、自分でも出方がわからなくなってしまう。声の限り叫んで助けを呼んだが、本人以外の誰も秘密室への行き方がわからない。行き方を探しているうちに渡海屋は飢え死にしてしまった。

渡海屋亡き後、この時計塔の持ち主になったのは、渡海屋の女中であつた長田鉄だつた。鉄は強欲なことで知られており、一生かかつて財宝を探し出すつもりなのではないかと噂されていた。鉄には養子の長田長造と養女の和田ぎん子がいた。鉄はこの二人を夫婦にするつもりでいたが、ぎん子は長造を嫌つており結婚を認めなかつた。いくら説得しても結婚に傾かないので、鉄はぎん子を自分の財産の相続人にすると決め、その旨の遺言状まで書いたが、ぎん子はまだ首を縦に振らない。長造は、ぎん子と結婚も出来なければ、財産も相続できないとなつて、鉄を恨んで家出してしまつた。それでも鉄は諦めきれず説得を続けるが、とうとう折れて財産は元通り長造に譲ることにして遺言状を書き直そうとしていた矢先に、時計塔の真下の自分の寝室で何者かに殺された。この事件以降、時計塔は渡海屋の霊に加えて鉄の幽霊も出ると噂されるようになり、誰も近寄らなくなつた。

鉄の事件から六年後、主人公・北川光雄の叔父である児玉丈太郎が「幽霊塔」を買収する。下検分に訪れた光雄は、鉄が殺された部屋にいた野末秋子と出会う。秋子は何故か渡海屋しか知らないはずの塔の時計の動かし方を知つていた。それに加え、財宝の在処を示す呪文や絵図を自分なりに研究していると言ひ、その成果を記した手帳を部屋に置いてあるから真剣に研究するようにと光雄に言う。

秋子が時計塔の財宝について研究し、その成果を手帳に記してあると知つた付添人の肥田夏子は、手帳を盗み出し、養虫園を営む兄の岩淵甚三に送つて財宝の在処を突き止めようとする。しかし、手帳は秋子にしかわからないように書かれていたため、二人は直接教えるように秋子に迫るが、きつぱりと断られてしまう。そこで夏子と甚三は、鉄の養子で時計塔の元住人である長造に、秋子の手帳を渡して渡海屋の財宝は伝説ではないことを伝え、財宝を探させようとした。長造はこの話に乗り、財宝を手に入れるべく時計塔の部屋に忍び込むが、雷と十二時の鐘に驚いて心臓発作を起こして亡くなつてしまう。亡くなつた後に判明したのが、六年前に鉄を殺した犯人は長造だつた。長造は、鉄の財産を自分のものにするために鉄を殺したのだつた。養母を殺した時にちょうど十二時の鐘が鳴つていた。それ以来、長造は十二時の鐘を恐れるようになった。時計塔の財宝を手に入れようとした時、鉄が亡くなつたのと同じ場所で、同じ十二時の鐘が鳴つて驚き、持病のあつた心臓に発作が起きて亡くなつた。まさに「天罰」が下つたのである。

作中で財宝を手に入れようとした人々のうち、渡海屋、鉄、長造の三人は、何らかの形で時計塔で亡くなつてゐる。渡海屋は、自らの莫大な財宝を奪われまいとして、大掛かりな仕掛けを作つて隠したが、その自らが作つた仕掛けによつて命を落としてしまう。長造は財産欲しさに鉄を殺し、さらに時計塔の財宝も手に入れようとしたが「天罰」が下つたように、養母を殺した時と同じ場所、同じ時間に亡くなる。そして亡くなりはないが、夏子と甚三も「内地にも居たたまらず、シャンハイ方面に高跳びをした」らしいと言われており、最終的に逃げ出している。時計塔で亡くなつた人は、財宝

や財産、つまりお金に執着していたということが共通している。

また、このお金に執着する人は、時間も惜しむ傾向があることも共通している。

鉄は、ぎん子に長造との結婚を同意させるために、自分の財産の相続人にするという条件を持ち出す。要は条件にお金を持ち出して「手っ取り早く」ぎん子を説得しようとしている。そして夏子と甚三兄妹は、財宝を手に入れるために、秋子が時計塔の内部の財宝の在処について研究した成果を記した手帳を盗む。さらに、書いてあることを直接教えるように秋子に迫る。自分で財宝の在処について考える時間も、探す手間もかけるつもりはない。自分たちではわからないとなると、長造に財宝は本当に存在するのだと信じさせ、秋子の手帳を渡して財宝を探らせようとする。長造も、財宝が実在すると教えられてはじめて財宝を探そうという気になる。それに、もう財宝の在処がわかるような手がかりも渡された。夏子と甚三兄妹と長造、お互いにとつて最も「手っ取り早い」方法で、財宝を手に入れようとしている。

登場人物の、こうしたお金を得るために時間や手間を惜しむという姿勢には、前節で触れた「時は金なり」の価値観があると思われる。「時は金なり」は当時、一般的に奨励された価値観であった。

時計塔で亡くなった人は、財宝（財産）に執着していたこと、それらのためにかかる時間や手間を惜しむ、いわば「時は金なり」の価値観を持つていることが共通している。一方で、時計塔に関わっても無事だった人もいる。光雄と秋子である。二人はなぜ時計塔にあつても無事だったのかを次節で見ていく。

二二 財宝にたどり着ける人々

第一節と同様に、光雄と秋子の時間とお金に対する価値観について話に沿って見ていく。

夏子が自分の手帳を盗んで甚三に送った。このことを知った秋子は、取り返しをつかないことをしてしまった、あの手帳が悪人の手に渡つては、と言つてうろたえる。秋子の様子を見かねた光雄は、自分が養虫園に行つて手帳を取り返してくるという。それから何日か過ぎた頃、甚三が屋敷の敷地内に忍び込み、秋子に手帳の中身を教えるように言いに来たが、秋子に断られる。仕方なく帰路についた甚三の後をつけて、光雄は養虫園にたどり着いた。甚三は秋子にとつてよからぬ輩だと思つた光雄は、旅費は出すからシナに行け、二度と秋子の前に姿を見せるなと詰め寄る。

ここで光雄は、秋子を守るために彼女に害を為している人物を遠ざけるのにお金を使おうとしている。

しかし甚三は、自分や夏子がいなくなつても変わりはない、秋子の運命を握っているのは芦屋晁斎という人物だと光雄に教えた。一方、屋敷では叔父が何者かに毒殺されかけ、その容疑者として秋子があがつていた。秋子の潔白を証明するために、光雄は東京にいる芦屋を訪ねる。この時、入れ違いで芦屋のもとから立ち去る黒川弁護士を目にする。芦屋に、秋子が苦境に立たされているからもう一度救つてほしいと頼むと、まず報酬を受け取るのが先だと言われ、五千元（今の二百万円ほど）と註があるを要求される。光雄はその高価なのに驚きはしたが、それぐらいなら父の遺産で充分間に合うからといってすぐに支払つてしまう。

「ここでも報酬としてお金が出てくる。光雄自身も高価だと思いつつも、秋子を助けるためにと、お金を惜しまずに支払っている。」

そして、芦屋から衝撃の事実を告げられる。実は秋子は、鉄を殺した犯人として終身刑になり数年のうちに獄死した、養女の和田ぎん子だというのである。ぎん子は、当時彼女の弁護士だった黒川弁護士と、夏子と甚三たちの手を借りて脱獄、そして芦屋の整形手術を受けて、野末秋子として生まれ変わったというのである。秋子の過去を知ってしまった以上、妻にすることは出来ない。しかし、まだ秋子が犯罪者であることを信じきれないという二つの気持ちの間で光雄は思い悩む。長崎に帰ってきた光雄は、その足で芦屋のところであれ違いになった黒川弁護士を尋ねる。黒川に、過去を知った今でも秋子を妻にしたいと思うのかと聞かれ、それは出来ないと言光雄は答える。黒川のもとを訪れていた秋子は、光雄が自分の過去を知ってしまったこと、妻には出来ないと言ったのを聞いて、失望のあまり気絶してしまう。この時、黒川と光雄の話を外で聞いていた刑事の森村が秋子を逮捕しようとするが、光雄と黒川が阻止する。この間に秋子は逃げ出し、幽霊塔へ向かう。光雄は、秋子は非常に苦しい立場にある、このまま幽霊塔に帰って自殺するつもりではないのかと心配するが、黒川はこのくらいで自殺する秋子ではないと言っている。秋子は鉄を殺してはいない、真犯人が別にいることが最近になって判明したのだという。事件当時は手首の傷が動かぬ証拠となつて有罪を覆せなかった。終身刑になったぎん子は、黒川に「お上に真犯人を探し出す力がないのなら、私自身で探してみせる。どん

な艱難辛苦を嘗めても、きつと探し出してみせる」と言い、それ以来、真犯人を探すが彼女の使命のひとつとなつたのだという。

「どんな艱難辛苦を嘗めても」という秋子の決意には、自身の潔白を証明するために、気の遠くなるような時間がかかることになつてもかまわない、と覚悟しているのがわかる。

黒川は光雄に、秋子の潔白の証拠を握り潰されなければ、秋子が光雄を嫌うように仕向けると言う。秋子のこれから先の人生を考え、光雄は黒川の言う通りにし、自分は秋子を諦めることを約束する。翌朝、黒川との約束を果たすために屋敷に帰る途中で光雄は、昨晩屋敷に帰る秋子を見たという小僧に会う。小僧によると、秋子は途中で薬屋に立ち寄つたという。薬と聞いて嫌な予感がした光雄は続きを聞くが、小僧は情報を小出しにして、その度に情報料を要求してくる。小僧は自分の持つ情報で、相手から最大限、情報料をもらおうとするのである。

光雄自身も、小僧のやり方を憎たらしいと思いつつも、彼の持つ情報は秋子の生死に関わつてくるため、情報を聞き出すためにお金を惜しまず渡している。

そうして全て聞き出したところ、秋子はいかにも怪しげな薬を買つた後、大急ぎで屋敷に戻り、時計塔の窓から中に入つていったという。これを聞いて、時計塔の内部で自殺するつもりだと悟つた光雄は、秋子の後を追いかけて時計塔内部に入ろうとするが、そこには渡海屋が作つた仕掛けが待ち構えていた。時計塔の機械室の中に入るにはまず、緑盤の扉を通らなければならない。この緑盤は、一時間ごとに一寸ずつずれていく仕組みになっている。ここを通るには、緑盤が完全に開く十二時になるまで待たなければならない。こ

の緑盤を通過したら、その先は時計のゼンマイなどがある機械室になつてゐる。この機械室から出るための石の扉も、緑盤と同様、一時間に一寸ずつしか開かないようになってゐる。つまり、入口である緑盤の扉を通るために最大十二時間、その次の機械室の石の扉を通るために、また十二時間待たなければ通れない仕組みになつてゐるのである。石の扉を通過したら、階段を進み、地下まで降りるとそこからは迷路になつてゐる。この仕組みは、文字通り「時間をかけない」と財宝にはたどり着けないようになってゐるのである。これらの仕掛けを突破して、光雄はついに秋子を見つける。早くここから出ようと言う光雄に、秋子は財宝が本当にここにあるということとを伝え、この財宝を正当な持ち主の手に渡したかったのだと告げる。その後、二人は財宝を一切所有せず、全て免囚保護事業と科学研究所の設立のために使つた。

その後の財宝の使い道から、光雄も秋子も財宝に執着がないことがわかる。また、光雄がお金を使うのは、いずれも秋子を助けることに繋がると判断した時である。光雄は、秋子を救うためにお金を使うことを惜しまないということがわかる。

ここまで、秋子の時間に対する考え方が窺える箇所があつたが、光雄の時間に対する考え方はどうであろうか。それがわかる場面を以下に引用する。

「それがほんとうならば、僕に約束してくださることはできませんか」

私は非常な勇気を出して、並んで腰かけてゐる彼女の右手を取つた。

「あら、あたし、そういうお約束のできる身分ではありませんのよ。あたし、いろいろ深い事情がありまして、人の妻に慣れる身の上ではないのです」

(中略)

「どういう事情か知りませんが、そんなもの、僕の力でなくしてみせます。ただ、あなたがその秘密を僕に打ちあけてくださりさえすればいいのです」
私はいよいよ大胆になつた。

「いいえ、それはとてもだめですの。あなたにどれほどの智恵や力がありなすつても、この私の不思議な運命を打ちひらいてくださることはできません。人間業には及ばないほどの、それはそれは深い事情がありますの。これがお話できたら、あなただつてきっと無理はないと思つてくださるでしょうにねえ」

(中略)

「それじゃあ、もうお尋ねはしません。しかし、ねえ秋子さん、こういうお約束をしてくださるわけにはいきませんか。それはね、もしあなたが結婚してもさしつかえないような境遇になつた場合は、ほかの人とでなく、私と結婚してくださるという」

(中略)

「でも、そんな空なお約束をしましても、あたしは生涯人の妻になれる身の上ではありませんから」

「いや、かまいません。どんな空な約束でもかまいません。もし万一そういう場合が来たら、僕の妻になると約束してください。僕はそれだけで充分満足します。それ以上のことは決して望みません」

「ホホホホ、そんなお約束をして、もしあなたのお気がすむのでしたら」

秋子さんは淋しそうに笑った。

「ええ、気がすみますとも、どうか約束してください」

私はもうだだっ子であった。

「では、お約束いたしますわ。そんなお約束、実現する時は永久にあるまいと思えますけれど……」

彼女は悲しげに語尾をにごして、さしうつむくのであった。二九

先述したように、秋子は養母殺しの濡れ衣を着せられている。どんな艱難辛苦を嘗めることになっても自身の潔白を証明したいと思っており、そのために気の遠くなるような時間がかかることも覚悟しているということが、引用のなかで「生涯」「実現する時は永久にあるまい」と言っていることからわかる。秋子はこのように長い時間がかかること、長い時間がかかっても実現されないかもしれないことを理由に、光雄に空しい約束をすることを思いとどまらせようとしますが、光雄はそれでもかまわない、秋子の抱える事情が解決するまで待つと言いつける。光雄は、秋子本人のことに關しては時間がかかることを厭わない。光雄も秋子も、自分が求めるものが必ず得られるというあてがなくても、時間をかけることができる。財宝に執着せず、時間をかけることを惜しまない。二人がこのような価値観を持っていたため「時間をかけない」と通過できない時計塔の仕組みを突破できたのではないだろうか。

時計塔では、財宝や財産、つまりお金に執着した人々は不幸な結末を迎え、そうでない人は自分の求めるものを手に入れ、さらに財

宝も得て幸せになる。これだけを見ると時計塔は、欲深い人を罰して無欲な人は助かる、勸善懲惡的な空間に思える。しかし、時計塔は第一章で述べたように、どこか不気味で恐ろしい場所として描かれていて、単なる勸善懲惡の空間というにはすつきりしない。こうした勸善懲惡の空間だとは言いつれない時計塔の恐ろしさは何からくるのだろうか。次節では時計塔という空間について考えていきたい。

二一三 時計塔という空間

財宝にたどり着くためには時間をかけなければいけない仕掛けが待ち構えている。これを突破できたのは、光雄や秋子のような時間がかかることを惜しまない価値観を持つ人たちであったと第二節で述べてきたが、実はこの結果は必然だと言える。なぜなら、財宝に執着する人々は時間や手間を惜しむため、「開くまでひたすら待つ」という時間のかかる仕掛けには向かないからである。さらに言えば渡海屋が、財宝に執着するような人が来ることを予想して、そういった人を排除するためにこの仕掛けを作ったとも考えられる。

次の引用は、渡海屋が自身の作った仕掛けによって亡くなった後の後日談である。

伝説の宝物を掘り出そうという目論見は、それまでに、世間の欲張り連中によつてたびたび企てられたのだが、何しろこの頑丈な大建築を毀すだけでも大変な費用がかかるのだから、もし言い伝えがでたらめだったらと、二の足を踏んで、實際宝探

しをはじめたものは、まだ一人もないくらいである。三〇

「世間の欲張り連中」つまり財宝を手に入れようとする人々は、時間を惜しむ傾向がある。真正面から探すという、時間のかかる方法は選択肢にないようである。そうなると彼らは財宝を掘り出す方法として最も「手っ取り早い」であろう「毀す」ことを考える。しかし、壊すのにも莫大な費用がかかる上に、確実に財宝が出るというあてもないので、結局は時間とお金の無駄を恐れて財宝を諦めている。財宝はこうして結果的に守られる。

「欲張り連中」が排除の対象だとすると、時間もお金も惜しまない光雄や秋子にはこの仕掛けは効果がない。したがって、財宝までたどり着けたのである。

この時計塔は、渡海屋の「財宝を奪われまい」とする執着と、そのために「欲張り連中を排除する」という、言ってみれば悪意のもとに作られている。時計塔は渡海屋が建てた時から悪意のある空間である。財宝に執着する人は、それを手に入れるために時間のかかる仕掛けに挑もうとせず、「手っ取り早い」方法を取る。財宝や財産を得るために邪魔となる他者を排除しようとする。欲張り同士が互いを排除しようとした結果、人が亡くなる。これは一見、欲をかい人々が時計塔で罰を受けているように思えるが、そうではない。時計塔では、悪意が、結果的に悪意を懲らしめることになるという、皮肉が起こる空間なのである。

時計塔は、単なる勸善懲惡的な空間ではない。そこは、財宝に執着する人同士が、互いを排除しようとして悪意を向け合い滅ぼし合う空間であり、これが時計塔にどこか恐ろしい雰囲気を持たせてい

るのである。

おわりに

乱歩の「幽霊塔」では、時計塔の文字盤が「目」などと表現されており、原作や涙香版よりも時計塔はどこか恐ろしい、不気味なものとして描かれている。このように描かれたのは、新しい時間制度がだんだんと浸透してきた一九三〇年代には時計や、そこに表される時間はそこにあるだけで人々を縛り、時には追い詰めることもあるものと感じられていたからである。

また、時計塔が恐ろしい、不気味だと感じられるのには、この場所で人が亡くなっているということも関係している。時計塔で亡くなる人々は、財宝や財産に執着していた人々である。こうした人々だけが時計塔で亡くなるのは、一見すると欲張りに罰が下ったように思えるが、時計塔の仕掛けについて考えてみると、それは少し違ってくる。財宝にたどり着くためには、時計塔の内部に入るための仕掛けを突破しなければならぬ。この仕掛けは、作った本人であり、そこに隠された財宝の持ち主である渡海屋が、財宝を奪われまいとして、お金に執着するような欲張りのことを考慮して作った仕掛けなのである。お金に執着する人は、時間を惜しむ。言うなれば、時間は貴重だから無駄にするなという、「幽霊塔」が発表された当時に広められていた「時は金なり」の価値観を持っている。こうした人々を排除するために、渡海屋は「時間をかける」ことでしか突破できない仕掛けを作った。この渡海屋の悪意のある時計塔という空間では、財宝を狙う者同士が互いを排除しようとする。時計塔では、

悪意が、結果的に悪意を懲らしめることになるという、皮肉が起る空間なのである。

一 「幽霊塔の予告文」『講談倶楽部』一九三七年三月号

二 「黒岩涙香、江戸川乱歩による『幽霊塔』の幻の原作とウィリアムスン『灰色の女』(近畿大学文学部紀要『文学・芸術・文化』二〇〇三・十二)アリス・マリエル・ウィリアムスン(一八六九—一九三三)イギリスで生まれたが、アメリカ人の夫、チャールズ・ノリスと結婚後、渡米している。結婚後は筆名O・Z・ウィリアムスン夫人を主に用いている。著作は単独のものとは妻合作のものともに多数。『灰色の女』は単独著作で出世作だった。生前はかなりの人気作家で、小森健太郎によれば一九〇〇—一九一〇年代のアメリカの小説部門の売上げベスト〇に数度ランクインしている。日本では、涙香の『幽霊塔』の他に、矢野虹城『怪屋の奇美人』(一九二〇年)、春日野緑『花嫁誘拐』(一九二二年)といった邦訳がある。

四 小森健太郎の「黒岩涙香、江戸川乱歩による『幽霊塔』の幻の原作とウィリアムスン『灰色の女』(近畿大学文学部紀要『文学・芸術・文化』二〇〇三・十二)のなかで、原作確定に至るまでが述べられている。一九八〇年代半ば、藤井茂夫が、古いアメリカ映画の中に、涙香の『幽霊塔』と筋がそっくりなものを発見、そのフィルムの原作とされているのが、A・M・ウィリアムスンの『灰色の女』だと報告した。この報告をもとに伊藤秀雄が当時の映画カタログであらすじを見て、その物語が『幽霊塔』と同じであることを確認した。そして二〇〇〇年に小森がインターネットの古書検索で『灰色の女』を発見、入手して確認したところ涙香の『幽霊塔』の原作であると判明した。

五 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』講談社、一九七九・二

一五七頁。初出は現在入手困難なためこちらから引用した。

六 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』講談社、一九七九・二

一五八頁

七 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』(講談社、一九七九・二)

一五八頁

八 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』(講談社、一九七九・二)

一六〇頁

九 黒岩涙香『黒岩涙香集』(筑摩書房、二〇〇五・四) 九頁

一〇 黒岩涙香『黒岩涙香集』(筑摩書房、二〇〇五・四) 十頁

一一 A・M・ウィリアムスン『灰色の女』論創社、二〇〇八・二) 一—二頁

一二 A・M・ウィリアムスン『灰色の女』論創社、二〇〇八・二) 四頁

一三 『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—五頁

一四 『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—五頁

一五 橋本毅彦、栗山茂久『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』

六頁

一六 中村尚史『近代日本における鉄道と時間意識』(橋本毅彦、栗山茂久『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』二一—三頁

一七 『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—四六頁

一八 『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』一八〇頁を参考にした。

一九 『時の尊さ』(青木季子作詞、永井幸次作曲)『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 二七—三頁

二〇 『金より尊い時間—田淵巖作詞、永井幸次作曲』『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 二七—三頁

二一 『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—八頁

二二 『時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—八頁

二三 『時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—八頁

二四 『日本児童文学大系第五巻小川未明集』(ほるぷ出版、一九七九・二)

二五 『時間意識の近代—時は金なりの社会史—』(法政大学出版局、二〇〇六・一〇) 一—三頁

二六 萩原朔太郎『時計を見る狂人』(『新作家』一九三一年五月号)

ここでは初出を引用した。西本が挙げているのは以下の通りである。

「或る瘋癲病院の部屋の中で、終日椅子の上に坐り、爲すこともなく、毎日時計の指針を凝視して居る男が居た。おそらく世界中で、最も退屈な、「時」を持って居る人間が此處に居る、と私は思つた。ところが反對であり、院長は次のやうに話してくれた。この不幸な人は、人生を不斷の活動と考へて居るのです。それで、一瞬の生も無駄にせず、貴重な時間を浪費すまいと考へ、ああして毎日、時計をみつめて居るのです。何か話しかけてご覧なさい。屹度腹立たしげに呶鳴るでせう。「黙れ！いま貴重な一秒時が過ぎ去つて行く。Time is life! Time is life!」と。(萩原朔太郎『萩原朔太郎全集第一巻詩集』(新潮社、一九五九・四)二七

「故にこの「自註」は、実には詩の註解と言ふべきものでなく、かうした若干の詩が生れるに至る迄の、作者の準備した心のノートを、読者に公開したやうなものである」と「散文詩自註」の前書で述べている。(萩原朔太郎『萩原朔太郎全集第一巻詩集』(新潮社、一九五九・四)四五―四五二頁)

二八 萩原朔太郎『萩原朔太郎全集第一巻詩集』(新潮社、一九五九・四)四六五頁

二九 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』(講談社、一九七九・二)二二八―二二九頁

三〇 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第十巻 幽霊塔』(講談社、一九七九・二)一六〇頁